
A.O.G -Agent Of God- ~代行者《エージェント》と三国の恋姫たち~

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A · O · G - A g e n t O f G o d - ～^{エージェント}代行者と三国の

恋姫たち～

【Zコード】

N2406Z

【作者名】

反省猫

【あらすじ】

また新たな一人の男が、今度は『恋姫無双』に似たセカイの地に降り立つた。男は、このセカイで何をするのか……それはまだ誰も知らない。

今、新しい外史の幕が上がる！！

この作品は、恋姫無双シリーズをモチーフにした2次創作小説です。

オリ主最強、キャラ崩壊、原作ブレイク、残酷な描写が苦手な方は、

あまりおすすめできません。

又、この作品は、

『A · O · G - Agent Of God - 』 真剣で代行者に

恋しなさい - 』

とクロスオーバーしています。もしよろしければそちらのほうもどうぞ！

A · O · G - Agent Of God - 』 真剣で代行者に恋
しなさい - 』

<http://ncode.syosetu.com/n9214y/>

オリキャラプロフィールその？（前書き）

オリ主とオリキャラの紹介をします。

オリキャラプロフィールその？

名 前： 室谷 大地

フリガナ：ムロヤ ダイチ

CVイメージ：木内 秀信（DARKER THAN BLACK
-流星の双子-の黒役）^イ

年 齢：21歳

身長：181.3cm

血液型：O

誕生日：12月24日

一人称：俺

あだ名：ダイチ

容姿：スーパー・ロボット大戦OGの後ろ髪が長く紐で結んでいるキョウスケ・ナンブ

（通常時は、黒眼青髪、氣解放時は赤眼金髪）

武器：刀 今まで培つてきた知識 体中に仕込まれている暗器

職業：何でも屋

家 庭：家族なし

好きな食べ物：炒飯

好きな飲み物：鉄観音

趣味 味：道具作り 料理 ギヤンブル バイク

特技 技：一度見た技や動きはすぐに覚えられる。

大切な物 :自分 バイク 師匠

苦手な物 :人の心を踏みにじる行為 外道 小さい子供

尊敬する人 :師匠

ある世界で何でも屋をしていた元傭兵。

あるとき、絶体絶命のピンチを管理者のルカに助けられ、
ルカにより代行者に任命され現在に至る。

普段は無愛想で寡黙だが、表面に出ないだけで実際は静かに燃える
熱血漢である。

己の熱しやすい性格をよく理解し自戒してはいる。

また、熱しやすい一方でプロ意識は高く、感情を押し殺して
目の前の任務に徹するように努めている正にプロフェッショナル。
赤子のときに剣の師匠に拾われ、15歳になるまで一緒に暮らして
いたが、

師匠の制止を振り切つて、軍に入ったが、ある事件がきっかけで
嫌気がさし、軍を脱退、それ以降傭兵をしていたが、
ある人物と知り合い、何でも屋に転職した。

色恋沙汰には鈍いが、その立ち振る舞いからよく女性から惚れられる。

天然の誇しであるが本人は気付いてないから立ちが悪い。

名 前：ルカ＝ツヴァイト＝ルミナス

フリガナ：ルカ＝ツヴァイト＝ルミナス

c/vイメージ：佐藤 聰美（生徒会役員共 七条 アリア役）

年齢：不明

身長：160.0cm

3 サイズ：85 55 83

血液型：不明

誕生日：不明

一人称：私

あだ名：ルカ

姿：ああつ女神さまつのスクルド成人版（青眼金髪）

武器：頬笑み 全知全能の力

職

業：第1級多世界管理者

家

庭：不明

好きな食べ物：不明

好きな飲み物：不明

趣味：不明

特技：どんなときでも頬笑みを絶やさない

大切な物：多くのセカイ 徒者 代行者達

苦手な物：ネガ・マリス

尊敬する人：不明

数多くのセカイを管理している神様。

詳しく述べ A · O · G - Agent Of God - ↪ 真剣
で代行者に恋しなさい!』
のオリキャラプロフィール参照

名前：稻葉

フ リ ガ ナ : イ ナ バ

c v イ メ ー ジ : 加 藤 英 美 里

(ま ど か マ ギ カ キ ュ ウ ベ え 役)

年 齢 : 不 明

身 長 : 110 . 7 c m

血 液 型 : 不 明

誕 生 日 : 不 明

一 人 称 : 私

あ だ 名 : イ ナ バ

姿 : 西 屋 の 口 , ゴ

武 器 : 不 明

職 業 : 神 の 徒 者

家 庭 : 不 明

好 き な 飲 み 物 : 不 明

好 き な 食 べ 物 : 不 明

趣 味 : 不 明

特技：どんなときでも礼儀正しい

大切な物：ルカ

苦手な物：ルカの怒り

尊敬する人：ルカ

神の従者その1。

詳しくは『A·O·G - Agent of God - 』真剣
で代行者に恋しなさい!』
のオリキャラプロフィール参照

名前：明々

フリガナ：メイマイ

c.vイメージ：豊崎 愛生（けいおん！の平沢 唯役）

年齢：不明

身長：112.0cm

血液型：不明

誕生日：不明

一
人
称
：
私

——人稱：私

あ
だ
名・メイ

容姿：メイド服を着た羊

武器：不明

職業：神の従者

家庭：不明

好きな食べ物：不明

好きな飲み物：不明

趙不羣

特 摘：何もないところを一歩見る

ノセナ物語

苦手な物：ルカの怒り

尊敬する人
：ルカ

神の従者その2。
姿形は、メイド服を着た羊のような生き物。
ルカの身の回りの世話をしている。

性格はそそがつしつく、かなりのデジツ子。
何もないところによく口ケる。
稻葉とは幼馴染。

オリキヤラプロフィールその？（後書き）

作者「だいたいこれが、今回の主人公とオリジナル登場人物のプロフィールです」

作者「オリキヤラのプロフィールは、章ごとに追加していきますので、お楽しみに～」

第0話『大地、恋姫のセカイに行くの事』（前書き）

はじめての人ははじめまして、知ってる人は毎度！ 反省猫です。
ということで、今回は、恋姫無双のセカイで、新たな代行者が駆け
回ります。

相変わらず、駄文ですが、暇つぶしにどうぞ～

第0話『大地、恋姫のセカイに行くの事』

大地 side

大地

『参つたな、これは……』

全方向から数百のマフィア達が、大地に銃を向けている。

ここは、あるセカイの裏カジノ。大地は、依頼によりこのカジノの裏で行われてる

裏ファイトの証拠を掴む為に、大地は裏ファイトに参加する為とう事で、

潜入に成功。

大地は、裏ファイトのトーナメントを勝ち上がり、チャンピオンの

ここを運営しているマフィアのボス、グラード=バキュラと闘つ事なつた。

一進一退の攻防を制し、辛勝した大地だが、そのせいで今の状況となつている。

大地

「（まあ、予想は出来たが、さてどうするか）」

大地は今の状況を考えていたその時、1人のマフィアが、

マフィアA

「良くもボスを！ かまわねえ！ こいつを殺つちまえ！…！」

バキュー…………ン！…！…！

それを合図に全方向から銃から銃弾が大地を狙つて放たれた。

大地は、避けようにも先程の闘いのダメージがあり、動けない。

大地

「（こ）れは、俺死んだな）」

そう言つて、目を瞑つたが、いくら待つても銃弾がこない。

ゆつくりと目を開けるとそこは今までいた裏ファイトの会場ではなく、

何もない真っ白い空間だった。

大地

「（こ）こは……どこだ？」

大地がこの部屋を見渡すと

女性

「うふふ、（こ）こは空間と空間の狭間のセカイですよ」

大地

「誰だ！…！」

そう言って、大地は構えて、声をした方を見るとそこには、金髪青眼の美しい女性が立っていた。

女性

「ふふ、驚かせて申し訳ありません。私は敵じゃないですよ」

女性は穏やかな声でそう言った。

大地は、訝しげにその女性を見て、

大地

「あんたは一体……？」

女性

「「はい、申し遅れました第1級多世界管理者ルカ＝ツヴァイト＝ルミナスと申します。

いわゆる……『神』です（ニゴジ）」

そう言って、微笑んだ。

これが、俺と神との出会いだった。

大地 side out

明々

「大地様、ルカ様がお呼びです」

羊によく似た　？の明々が、俺を呼びに来た。

大地

「ああ」

俺は明々に着いて行つた。

あの後、ルカがあの銃弾の雨から力行使して俺をこのセカイに連れてきたらしい。

ある意味命の恩人だ。

そこで俺は、命を救われた礼がしたいと申し出をしたら、ルカが、

ルカ

「なら私の代わりにセカイを廻つてください（ニコシ）」

と言わされたので、最初意味が分からなかつたが、

ルカから説明を受けて要約理解した。

ルカは、セカイにでてくるイレギュラーの対応とバグを修復する

『神の代行者』^{エージェント}になつてくれということらしい。

俺は、二つ返事で

大地
「了解」

と言つて、神の代行者エージェントになつた。

それからルカに力をもらつた。

?不死及び強靭な身体

?身体能力限界突破

?氣の発現及び許容量無限

?創造の力（人体練成は無理でも死者蘇生は可能）

?なでボ、にこボ（これはルカが勝手に付けた）

?毒などの状態異常無効

?今度行くセカイの知識とそのセカイで役に立ちそうな知識

?戦闘能力成長限界突破

もらつた力は以上である。

それから少ししてルカのいる場所へと明々と一緒に辿り着いた。

ルカ

「大地、さつそくで悪いのだけど、あるセカイに行つてもらえますか？」

大地

「どんなセカイだ？」

ルカ

「三国志に似てるけど英傑達が全員女性になつていてるセカイです」

その説明に大地は、

大地

「わかつた。そこのセカイの知識を頼む」

即答した。

ルカ

「あの、こういってはなんですが……考えたりしないんですか？」

ルカも即答されるとは思つてなかつたようで困つた表情でそう言った。

大地

「俺は、君の代わりにセカイを廻るのだろう？」

ルカ

「はい、そうです」

大地

「なら君は俺の依頼主クライアントとだ。」

俺は君と契約したようなもんだ。

なら、考える必要はない。

俺は依頼を遂行するだけだ」

ルカは、それを聞いて

ルカ

「なるほど、わかりました。ではお願ひします」

大地

「了解」

ルカ

「後、あなたのそのセカイの使命ですが、イレギュラーの対応とバグの修正

はもちろん、英傑たちと特異点の青年を導いてください」

大地

「特異点の青年？」

ルカ

「その特異点の青年は、自分が何をそのセカイで成すか知りません。ですので、あなたに彼の監視及びあなたの考えてその少年を導いて欲しいのです」

大地

「ふむ」

大地は少し考え、

大地

「了解した」

それからそのセカイの知識と色々役立つものをもらい、大地はゲートの中央に進む。

大地

「では、行つてくる」

大地は振り向き、そう言った。

ルカ

「ええ、お気をつけて行つてらっしゃい（ニコッ）」

ルカが見送るのを見て、大地はゲートの中央に入り消えていた。

稻葉

「行つてしまわれましたね」

大地が去つた後、稻葉が、ルカにそう言つた。

ルカ

「ええ、あの人なら彼女たちとあの少年を救う事が出来るかもしけない」

少し悲しそうな表情でルカが言つた。

明々

「ルカさま……」

ルカは、悲しい表情からいつものにこやかな表情に変わり、

ルカ
「稻葉、観測者の一人に連絡を……」

稻葉

「はい！ ルカ様」

そう言って、稻葉はその場から去っていた。

e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

t
o
b

第0話『大地、恋姫のセカイに行くの事』（後書き）

作者「ついにはじまりました！！」

『A · O · G - Agent Of God - 』代行者と

三国の恋姫たち』！』

大地「明々に連れて来られたが、ここは？」

作者「といふ事で、ゲストの室谷 大地さんです」

大地「どうも、室谷 大地だ」

作者「これから彼には、恋姫のセカイで大いに駆け回つてもらいます！」

作者「お前まで駄作者つて言うのかyo!!」

大地「とりあえず、用件は分かった。だから落ちつけ駄作者」

大地「それがテンプレなのだろう？」

作者「誰からそれを？」

大地「稻葉に」

作者「稻葉～～！！！！！ どこじゃあ～」

そしてその場から去つていく作者

大地「やれやれ、次回予告の時間だ。次回は、俺とある少年と少女達が出会いう物語だそうだ。

次回 第1章 第1話 「代行者、天の御遣いに会うの事」
でまた会おう」

大地「あ、戻ってきた」

第1話　『代行者、天の御遣いに会つての事』（前書き）

前回までのあらすじ
ルカに代行者エキシブを任命された何でも屋の室谷 大地。
ルカの依頼により、恋姫のセカイへとゲートを通り向かうのだった。

第1話『代行者、天の御遣いに会つ之事』

ゲートから出てくるとそこは、見渡す限り荒野だった。

大地

「……さて、着いたのはいいが、ここは そうか」

ルカからもらつたこのセカイの知識により今いる場所がわかつた。

今現在、俺がいるのは幽州啄郡という処の五台山の麓らしい。

大地

「ふむ、これからどうするか……ん?」

空から何かが一ぱらに向かって落ちてくる。

大地

「流星……か?」

最初は小さかつたのにだんだんこっちに近づくにつれ、大きくなっている。

大地

「ヤバい!」

そういうと大地を蹴つて後方500mに跳ぶ。

ゴオオオオオオオオオオオン!!

落ちてきた流星は、轟音と共に凄まじい光を放ち、周りの視界を真っ白にした。

大地

「……くつ！」

大地は、目を瞑り光が収まるのを待つ。

数分後、薄目を開け、光が収まったのを確認すると目を開き、流星が墜ちた場所を見る。

すると一人の白い制服を着た青年がうつ伏せに横たわっている。

大地

「ふむ、あれがル力が言つていた特異点か」

そう呟くと墜ちてきた青年の傍に駆け寄った。

大地

「おい、大丈夫か？」

青年は気を失つており、目を覚まさない。

大地

「とりあえず、頬を叩いてみるか」

そういうと青年の頬を軽く叩く

ペシ！ ペシ！

大地

「お～い、起きるー。」

青年

「ん……」

ペシ！ ペシ！

大地

「しつかりしる」

青年

「んん……」

ペシ！ ペシ！

青年

「んつ……」

青年はようやく田を覚ました。

大地

「……おはよう」

青年

「ん……？ エー……っど、おはよう……」
「せこります へつ？」

大地

青年は、今の状況が分からないと呟いた感じである。

「俺は、室谷 大地。お前の名前は？」

青年

「北郷……一刀です……ここはー？」

一刀と名乗った青年に大地は、こここの場所の名前を言った。

大地

「幽州啄郡の五台山の麓らしい」

一刀

「らしこつて
」

大地

「俺も今着いたばかりなんでな」

そう言って、大地は淡々とそう言った。

大地の言葉を聞いて一刀は大地の格好を見た。

赤いジャケットコートに黒いタンクトップ、赤いカーポパンツ胸にはドッグタグを身に着けており、

腰には、刀を差している。

一刀

「一つ質問なんですが、ここは日本じゃ？」

一刀の質問に

大地

「違うな、ここは後漢時代の中国に似たセカイだ」

それを聞いて、一刀は驚く。

一刀

「ええええええええええ！」

大地

「とりあえず、落ちつけ」

大地の落着き払つた雰囲気に

一刀

「いやいやいや！ 今の聞いたら誰でも驚きますって！」

一刀の突っ込みに

大地

「そうなのか？ まあいい……とりあえず、順だつて説明してやる。このセカイがどういう処なのかなあ」

そういうと二人は地面に座り、大地が説明をした。

一刀 side

学校から帰る途中、突然意識を失つた俺。

次に目を覚ました時には、目の前に見知らぬ荒野と見知らぬ男がいた。

男の名前は、室谷 大地さん。

俺よりか4つくらい年上くらいの感じの人だ。

で、大地さんにこの場所を聞くと俺は驚かずにはいられなかつた。

幽州啄郡！ 後漢時代の中国に似たセカイだつてえええ…………

なんで、俺がそんなことに……。

俺が動搖してるとびづやうり大地さんがこのセカイの事を教えてくれるらしい。

とりあえず、頭を切り替えて話を聞こう。

それからどうするか考えるんだ。

俺は、大地さんの話に耳を傾けるのだった。

一刀 side out

大地は、このセカイの事を一刀に説明した。

一刀

「そなな……俺はなぜ、ここに

一刀が動搖していると

大地

「それについては、俺は知らないが、俺はある依頼でこのセカイに来た」

大地は、一刀の事を知つてたが知らない感じでしゃべり、

一刀

「ある依頼って？」

一刀から訊ねられた。

大地

「一応、これは依頼なんでな、簡単に話す訳にはいかないんだ。とりあえず、君に危害を加える事はまずない。これだけははつきりしているから

心配する事はない」

それを聞いて一刀は、

一刀

「いや、依頼なら仕方ないです。それに大地さんいなかつたらこのセカイでどこいいかわからないので」

その言葉を聞いて大地は感心する。

大地

「（お人よしだが、それでも状況を見極める力はあるか）」

大地がそんな事を思つていると

一刀

「大地さん、どうしました？」

大地

「……いや、何でもない、とりあえず、村かどこか人のいる場所を
目指すか」

そう言つて歩き出すと

一刀

「はい！」

一刀は、大地の後ろを着いて行こうとしたその時、

？？

「お待ちください！！」

大地・一刀

「ん？」

二人が振り返ると黒髪の綺麗な女性が俺達を呼び止めた。

女性

「私の名前は関羽雲長と申します。お二人は、天の御使い様と神の
代行者様ではありませんか？」

大地と一刀は向きあつて、その後

大地・一刀

「はあああ～～？」

と叫んだのだった。

to
be
continu

d
...

第1話 「代行者、天の御遣いに会うの事」（後書き）

作者「という」ことで、一刀君と合流です「」

大地「なあ、これから蜀ルートで話進めるのか？」

作者：いせ、蜀ルートを基軸に他のルートを混せるが、

大地「そんなんて話が纏まるのか?」

作者 - なんとかせいでみねる

大地・まおと「あえず かんにれ」

作者　吉田　全國の文部省川越市上北郷　一乃春の登場人物

卷之三

金華府志

一ノ九
元治元年
とれぐらひ

作者 - 夏候惇くらい

一万 まじで～～！～！

作者「とりあえず、色欲にいかないように俺が調整してやる」

一刀「いやだ」

そして作者に連れて行かれる一刀。

それを呆れながらも見送る大地

大地「行つてしまつた……。とりあえず次回予告だ。

備達は蜀を作ることとなる。但し、劉備に出会ふのだが……。

の事』でまた会おう。

大地「合掌……」

チ——ン！！

第2話『大地、劉備に理想の厳しさを教えるの事』（前書き）

大地は、恋姫のセカイに着いた直後、北郷 一刀と出会う。

大地は一刀にこのセカイを説明し、一緒に村がないか探しに行こう
とすると

関羽と名乗る美少女に声をかけられるのだが……

第2話『大地、劉備に理想の敵しさを教えるの事』

大地と一刀は、少女の名乗った名前に驚いた。

二人は小声で話しあう。

大地

「おいおい、関羽ってあの劉備に仕えてた結構有名な英傑だよな？」

一刀

「ええ、そうです。美髯公とか呼ばれる大柄な鬍蓄えたおっさんのはずですよ?」

一刀はそう言つて、横目で関羽を見るとどうみても鬍が生えたおっさんではなく、

かなりの美少女だ。言つなれば美髯公ではなく美髪公と言つたほうがいいだろう

それくらい綺麗な長い立派な黒髪をしている。

一刀

「これがこのセカイなのか……」

大地

「とりあえず、話を聞いてみるか」

一刀は大地の言葉にコクつと頷いた。

大地と一刀は話し合いを終え、再び関羽を見る。

大地

「お待たせした……貴殿が関羽殿として、なぜ俺達がそうだと思つたんだ？」

大地の質問に

関羽

「それは、ある占い師のお告げに

“国が腐敗し、乱世乱れる時、流星と共に白い衣を纏つた天の御遣い現れる”

それと、

“セカイに危機が迫る時、赤き衣を身に纏つた神の代行者現れ、正しき道を示すだろう”

と言つていたのです」

それを聞いて、大地は、

大地

「なるほど……つまり俺達がその占い師が言つていた事と同じ姿をしていたから声をかけたんだな」

関羽

「はい、それと先程の流星もこちらの方角に墜ちるのみでいますので……」

それを聞いて、一刀は意味が分からないとばかりに首を横に傾ける。

一刀

「流星？ そんなのあつたつけ？」

大地

「お前は氣絶していたから知らないだろ？が、その流星が落ちた処にお前が倒れていた」

一刀

「なんだって！？」

大地

「それで俺達をどうしようといふんだ、関羽？」

大地は驚いている一刀をスル し、関羽に訊ねる。

関羽

「私の主の劉備様に会つていただけないでしょ？か？」

大地

「（一度、会つたほうがいいか……）」

大地

「では、案内をお願いしよう……一刀、行くぞ」

そのまま放置していた一刀を呼ぶと

一刀

「あ、ああ……わかった」

そう言って、関羽と大地の後を一刀は着いていった。

15分後、

関羽の案内を受けながら大地と一刀の二人は、ある川の畔に着いた。

「じつやら、ここが田的らしい。」

ピンク髪の女の子

「愛紗ちゃん～～ん」

ピンク髪の女の子が手を振りながら誰か呼んでいる。

関羽

「桃香様～～」

そういうて、関羽も女の子の名前を呼ぶ。

ピンク髪の女の子と赤髪ショートのかわいらしきお転婆そな小さい女の子が、

関羽の元に駆け寄つてくる。

ピンク髪の女の子

「愛紗ちゃん、この人達が……？」

関羽

「ええ、天の御遣い様と神の代行者様です」

そう女の子に言つと女の子は、一刀と大地をその大きな瞳で見た。

ピンク髪の女の子

「はじめまして、私の名前は、姓は劉、名は備、字は玄徳といいます」

続いて、赤髪ショートの女の子が

赤髪ショートの女の子

「鈴々は、姓は張、名は飛、字は翼徳なのだ」

どうやら、一人があの有名な劉玄徳と張翼徳らしい。

一刀
「（なんか想像と違うんだけど）」

大地

「（こ）はそう言つセカイだ、いい加減慣れろ……」

二人がアイコンタクトで話していると

劉備

「あのう……」

劉備がこちらを不安そうに上目使いでこちらを見ている。

一刀・大地

「（うつ……かわいい……）」

たしかに劉備も然ることながら関羽・張飛共に美少女と言われるくらい可愛い。

大地は、咳払いし、

大地

「こほん、失礼したはじめまして、室谷 大地だ。

こつちは、北郷 一刀」

一刀

「どうも、はじめまして」

と、一刀は軽く頭を下げる。

大地

「とりあえず、先に説明しておぐが、姓が室谷、名が大地、字はな
い」

大地がそう説明すると一刀も

一刀

「俺も姓が北郷、名が一刀だ、同じく字はない」

関羽

「そうですか……『天のセカイ』ではそれが普通なのですか？」

大地

「ああ……」こみみたいに『真名』もない、『真名』に当たるのは俺
達で言えば、大地と一刀だな」

それを聞いて女の子3人は驚いている。

関羽

「では、あなた達は、私たちに『真名』を預けてくれたのですか？」

関羽は、驚いた表情で大地達に聞いた。

一刀

「真名？」

一刀は関羽にたずねると

関羽

「はい、我等の持つ家族や親しき者にしか呼ぶことを許さない、神聖な名のことです」

一刀がそれを聞いて事の重大さに驚いていると

大地

「なら、その前に劉備殿……」

いきなり大地が劉備の名を呼んで、

劉備

「ふあー！」

どうやら舌を噛んだらしく恥ずかしそうにしている。

大地はそれによりと呆れながらも

大地

「君が目指すものは何だ？」

大地からの質問に一瞬、劉備は驚くが、すぐに真剣な表情になり、

劉備

「……みんなが笑顔で幸せに暮らせる国を作ることです」

劉備はそう答えた。

大地

「……なら覚悟はあるか?」

劉備

「えつ……?」

大地

「みんなとは、全部の人という事だろ?」

劉備

「はい……」

大地

「それならば、みんなが笑顔で幸せになる事はまずない……」

劉備

「!」

关羽

「何をつー!」

关羽が、大地に詰め寄るつとするが、

劉備

「愛紗ちゃん、待つて！－

劉備が関羽を制す。

関羽

「でも、代行者様は、桃香様の理想を……」

張飛

「そうなのだ！」

張飛は蛇鉾を持って怒っている。

劉備

「代行者様は何か考えがあつていってるんだよ、だから続きを聞こ
う……」

劉備は少し悲しそうな表情で関羽と張飛を宥める。

関羽

「桃香様がそうおっしゃるなり……」

張飛

「わかったのだ……」

劉備

「続きをお願いします」

劉備は真剣なまなざしで大地を見る。

大地

「（ほつ、こい田をしてくる……）この子はこい王になる」

大地は劉備の事を感心すると

大地

「では、話を続けよう……そもそも君は、何の犠牲も出さずには國を作るつもりか？」

劉備

「犠牲……それって……」

大地は、淡々と語つていく。

大地

「まず國を作るのには、まず自分達の知名度を上げなければならぬ。い。

そこで俺達の事を祭り上げて、名声とかと手に入れようと思つたのだろう?」

劉備

「はい……」

大地

「まあ有名になれば、人が集まつてくる……、そしてもつと知名度を上げて有名になるには、

闘わねばならない。ここまでわかるか?」

劉備

「はい……」

大地

「当然、その闘いで死傷者とか出る。みんなが笑顔で幸せになれるつていうのは、まず無理だ。

死んだ人、傷を負った人にも家族がいる。そして、闘う相手にもそれを悲しむ家族がいる」

大地

「つまり、君の言つてるのは、そういう矛盾を持つてはいるんだ。まさに絵空事だ。

それでも直、君は死んだ人達を乗り越え、自分も生き残り、その理想を叶える自信はあるか？

「どうなんだ、劉玄徳！！」

劉備

「私は…………」

劉備、辛そうな悲しそうな表情で両拳を強く白くなるまで握って、その場に立ち尽くしている。

关羽

「桃香様…………」

張飛

「お姉ちゃん」

二人は心配そうに劉備を見ている。

大地は、劉備に自分の理想の矛盾を伝える為、あえて悪者になった

一刀 side

事を

気付いていた。

たしかに“みんなが笑顔で幸せになれる国”なんて実際難しいのか
かもしれない

といふか無理だ。

いつかこの矛盾は、劉備にとって重い十字架になる。

その時になる前に事前に劉備にその事を伝え、考えさせて答えを出
させよ!と思つてゐるのだろう。

とりあえず俺は、大地と一緒に劉備の答えを待つことにした。

協力するのは、その答えを聞いた後だ。

一刀 side out

それから30分後

劉備の口が開いた。

劉備

「たしかに……代行者様が言つ通りなのかもしません。でも、
このまま放つておいたら、もつと悲しむ人達が現れる

「だから私は、自分の理想を叶えます。どんなことがあっても、

劉備

後悔だけはしたくありませんからーーー！」

そう、強い意志が籠つた瞳で大地を見る。

大地

司理

えつ……、いいんでですか……？」

「ああ……、君のその答えを聞きたかった」

そういうて、大地が微笑んだすると

劉備 · 關羽 · 張飛

大地

劉備

「(せへへ、今のは反則だよ～)」

關羽

「（私ともあろう者が、微笑み一つで――まで心を乱すとは――？）」

張飛

「(はにゃん、なんか顔が熱いのだ)」

大地

「？」

大地はなぜ3人が顔が赤いのかわからなかつた。

それを見ていた一刀が腕をすくめ、ヤレヤレとポーズを取る。

劉備は、息を整えて、笑顔で

劉備

「ありがとうございます。私の真名をあなた達に預けます」

大地

「……いいのか？」

劉備

「はい！ 私の真名は『桃香』と言います。これからよろしくお願
いします、ご主人様達」

大地・一刀

「ご主人様あ～？」

桃香

「はい！ 私たちの主人ですからご主人様です！」

その言葉に大地と一刀はアイコンタクトで会話する。

大地

「（おいおい、ご主人様つて……）」

一刀

「（どうします？）」

大地と一刀は、どうしたものかと考え、一つの答えを出す。

大地

「はあ～、じゃ、それでいいよ」

一刀

「うん」

二人は、彼女の満面の笑顔を見て、承諾するしかなかった。

関羽も先程の難しい顔から優しい顔になり、

関羽

「桃香様が預けたのなら、臣下の私たちも預けないわけには行けません。

私の真名は『愛紗』です。愛紗とお呼びくださいご主人様」

大地

「ああ……」

一刀

「わかった」

張飛

「鈴々は鈴々なのだ！ よろしくなのだ、お兄ちゃん達！」

一刀

「よひしぐな、鈴々

一刀が鈴々の頭を撫でる。

大地

「よひしぐな……」

一刀に続いて、鈴々の頭を撫でた。

鈴々

「ふにゅあああ～～」

鈴々は目を細めて喜んでいる。その姿はまるで猫のよつだ。

桃香はその光景に指を加え、羨ましそうに

「いいな～、私も頭撫でてもらいたいな～」

桃香

「桃香様あ～」

愛紗は、困った表情をしてそう言った。

「ひして、大地と一刀は、劉備達の仲間になつたのだった……

continued.....

to be

第2話『大地、劉備に理想の厳しさを教えるの事』（後書き）

作者「といふことで、桃香の仲間になりました」

大地「それはいいのだが……これから話はどうなるんだ？」

作者「それはですね）、次の話で分かると思いますよ」

大地「そうなのか？」

作者「次の話は、大地があの三人に出会います」

大地「あの三人？」

作者「次回、第3話『大地、昇り龍に出会うの事』でお会いします
よう」

大地「昇り龍？誰だそれ？」

？？「それは、次回のお楽しみですぞ」

大地「お前は一体……」

第3話『大地、昇り龍に出会つたの事』（前書き）

前回までのあらすじ

大地と一刀は、关羽に案内され、劉備達と出会つた。

そこで、大地は、劉備の理想の矛盾と危うさを感じ、劉備を試す。

劉備もそれに応え、何事があつても自分の理想を貫く事を決める。

そして、大地達は、劉備達に協力することになるのだが……

第3話『大地、昇り龍に出会いの事』

大地
「う～ん……」

桃香

「どうしたの？『ご主人様』」

大地は軽く唸つていてる。

大地
「いやな、これからのことでな……」

一刀

「これからのこと？」

大地
「まず、資金の問題。今俺達はお金がない。人雇うにしても先立つものがないとな～」

愛紗

「そうですね～……」

鈴々

「それに関しては鈴々は何もできないのだ～（汗）」

鈴々は苦笑いしてそう言った。

一刀

「う～ん、俺の鞄の中に売れそうな物あるかな～」

そういうと一刀は自分の鞄を漁り始めた。

一刀
「お！　いいものがあった」

そう言って、カバンから取り出したのは、無地のノートとボールペンとシャーペンだった。

愛紗
「これはなんですか？」

愛紗は、ボールペンを手に持つて、一刀に聞く。

一刀
「これはボールペンと言つて、墨が無くてもかける筆みたいな物かな」

大地

「ほう、それを売ればお金ができるな～。ちょっと貸してもらつていいか？」

一刀
「いいけど……何するのんだ？」

一刀からノートなどを受け取ると、大地は目を瞑り、

大地

「我、創成の力よ。わが手にある物を増やさん――！」

その瞬間、大地が手に持っていたノートとかボールペンとかがかなりの数に増える。

一刀・桃香達

「ええええええ！――！」

大地以外の全員がそれに驚く！

一刀

「いきなり増えたけど、それが代行者の力なのか？ 大地さん」

桃香

「すつ――い――、なんで増えたの――？」

愛紗

「それは仙術や妖術の類ですか！？」

鈴々

「にゃにゃ――！ お兄ちゃん凄いのだ――！」

大地

「ああ、代行者になつた時にもらつた力の一部だ。想像しても本物を作れるし

その場で見た物も作れるぞ。ただし、生物は無理。まあ……死者蘇生は出来るが……」

それを聞いて、全員口を開いて啞然としている。

一刀

「とりあえず、大地さんがバグキヤラといつのがわかつたよ

大地

「失礼な……まだ他にも俺以上のやついるぞ」

桃香

「嘘……『主人様より凄いなんて』

愛紗

「その人は一体……」

大地

「俺の師匠や……もう長い事逢つてないがな」

そういうて、大地は遠くを見つめた。

一刀

「とりあえず、これどこで売るの?」

大地

「愛紗、大きな街までどれくらいだ?」

愛紗に訊ねると

愛紗

「ここから、四里（15・708km）離れた所です」

大地

「四里か……わかつた、俺が行つてくる」

一刀

「行ってくるつて……この大荷物でどうやって？」

大地

「こうするのさー。」

そういうて、自分の腰のバッグにノートかを詰め出しだが、不思議な事にあんなにあつた沢山の物がその小さいバッグに入つて行く。

一刀

「これつてもしかして……」

大地

「ああ、このバッグは俺の能力の一つ、『無限倉庫』に繋がつている。

人も入れるぞ」

一刀

「まじで!!!!」

大地

「とりあえず、お前達もこのバッグに入れ、置いてくわけには行かないしな」

愛紗

「しかし……」

どうやら愛紗はバッグに入ることに抵抗があるようだ。

大地

「はあ～～、仕方ない……」

大地はそう言いながら、一刀の首根っこを掴み、バッグの中に入れる。

一刀

「ええええ！－！－！　ちょ、ちょっと－！－！」

大地

「心配するな……酸素はある」

一刀

「そういう問だ……」

一刀はあの小さいバッグの中に入った。

すると大地は桃香達のほうを振り向き、

桃香

「ひいいい！－！－！」

桃香達もバッグに入れるのだった。

桃香達がバッグに入つて数分後

大地

「さて、いくか……ハツ！」

大地は両足裏に氣を貯めて、一気に爆発させ大地を蹴って、

大きくジャンプし移動する。

大地はかなりの速さで四里の半分の一里まで進むと

ある村の前を通つた。

大地

「これは……」

どいつもやら盗賊に襲われている最中のよつだ。

大地

「仕方がない……」「れも縁だ」

そういうて、大地は村に入つていた。

家は燃え、女子供も関係なしに死体が地面に転がつてゐる。

村の中央まで進むとここを襲つてゐる三十人ほどの盗賊達がいた。

盗賊頭目

「なんだ、おまえは？」

盗賊B

「へつへつへ！　お前もこいつらみたいに死にたいか？」

盗賊C

「ビビつて、声も出ねえか、ギャハッハッハ！」

大地

「……黙れ」

大地は、凄まじい殺氣を放ちながら低い声でそう言った。

盗賊達

「ヒィ！……！」

盗賊達は殺氣を放つて、大地の霧囲氣に呑まれ震えている。

盗賊D

「か、かまわねえ！ やつちまえ～！～！」

そういつて一斉に盗賊達が襲ってきた。

すると大地は、そのままの体勢で腰に手を当て、刀を抜きすぐに鞘に戻す。

チヤキ！

チヤキン！

それは一瞬の出来事だった。

盗賊頭目

「お~お~、やつらのは」けおどしか？」

盗賊B

「怖くて動けねえ～か？ ギヤハハ」

盗賊C

「はつたりかよー。」

盗賊D

「とりあえず、死ねえ！」

盗賊達の罵罵雑言を無言で聞きながら、大地はこう呟いた。

大地

「もう終わった」

その瞬間、盗賊達から血飛沫が揚がり、30人の盗賊達の身体はバラバラになつた。

大地の後ろから

？？

「待たれよ！」

一人の槍を持った白い服の美少女が大地を呼び止める。

大地

「……何かな？」

？？

「二の惨状は、貴殿がやつしたことか？」

大地

「ああ、（盜賊達は）俺がやつた……」

？？

「ならば、こここの村の人の無念、この趙子龍が晴らしてくれる！
いざ、はああ つー」

そういうて、趙雲は、背丈よりも長い槍で田にも止まらぬ速さの鋭
い突きで、

大地を狙つてくる。

大地

「チイ！」

そういうて、刀を抜き、その当たれば確実に致命傷になりそうな突
きの一つ一つを

刀で、受け流して行く。

趙雲

「はいはいはいはい

つー

直も続く連續の突きに大地は、

大地

「はああああ…… 外装変換『源氏』！」

赤いジャケットコートが、朱塗りの立派な武者鎧に変化する。

趙雲

「なつ！」

趙雲は驚きながらも突きを止めようとせず、さらに先程よりスピードを上げ、

大地に突きを放つてくる。

そして、趙雲の突きが大地に当たる。

趙雲

「当たった 何イ！」

たしかに趙雲の突きは大地に当たったのだが、

突きは、鎧で阻まれ、大地にはダメージがない。

さらに驚いた事に趙雲の恐ろしくも速い突きで突かれたのに

大地の鎧に傷が一つも付いていない。

趙雲

「どうこうことだ……その鎧は一体……」

大地

「こいつは、特別せいでな。人の攻撃は通じないんだ」

趙雲

「それならー！」

趙雲は、槍を構え、霸氣を溜める。

趙雲

「はあ

！」

大地

「なら、こちからも遠慮しない……」

そつこつて、刀を鞘に戻し、腰を落とし居合の型に構える。

趙雲

「ではいくぞ！　はい　　っ！」

趙雲は、素早い動きで大地との間合いを詰め、必殺の一撃を

大地に喰らわせようとする。

大地も趙雲が自分の制空権に入るのを待つ、構えを解かない。

両者の距離が徐々に近づいた瞬間

？？

「ちょっと待って下さい～、星ちゃん！」

頭になんか変な置物をおいた少女が、大地と闘いを演じている少女に呼び掛ける？

趙雲

「なつ……風？」

15分後

趙雲

「誠に申し訳ありませぬ」

そういうて、趙雲は、大地に土下座をして謝る。

大地

「俺もいい方が悪かつた。すまない……」

？？

「まあまあ、済んだ事じやないですか？ とりあえず、お兄さんお名前は？」

大地

「俺は、室谷 大地だ」

？？

「姓が室、名が谷、字が大で真名が地でしょうか？」

眼鏡をかけたしつかりした少女が、そう訊ねる。

大地

「いや、姓が室谷、名が大地だ。字はない。真名はしいていえば大地だ」

それを聞いて3人は驚く。

趙雲

「では何か、あなたは見ず知らずの私達に真名を預けてくれたのか

？」

大地

「ああ、そういうことになるな」

趙雲

「では私も姓は趙 名は雲 字は子龍 真名は星です」

そつ言つて、大地に星は真名を預ける。

大地

「いいのか？」

星

「はい、それに私は先程の闘いであなたの武に惚れました。
ぜひあなたのお供にしてもらえませんか？」

大地

「ふむ、わかつた。仲間が多いに越したことがないし、
君ほどの武があれば、こちらも歓迎しよう」

？？

「じゃ、私もお兄さんに真名を預けるとしますかねー」

それを聞いた眼鏡をかけた少女が、その言葉に驚く。

？？

「風、いいのですか？」

？？

「はい、」Jのお兄さんおもしろがつなので

その返答を聞いた眼鏡の少女はため息をつき、

??

「はあ～～、わかりました。私もこの方に真名を教えます」

大地

「……君達もいいのかい？」

??

「はいー」

??

「私もかまいません」

大地

「わかつた……」

??

「じゃ、私から姓は程　名は立　字は仲徳　真名は風ですー」

続いて

??

「姓は郭　名は嘉　字は奉考　真名は稟です」

大地

「ああ、よろしくな」

そう言つて優しく微笑む、その瞬間、

星は顔を赤くし、凜は盛大に鼻血、それを見て風は口に手を当て笑つてゐる。

こうして、大地に3人の仲間ができた。

星

「主の微笑みは凄いですね　／＼／＼（テレ）」

大地
「主？」

星

「左様、私は今度からそつ呼ばせてもらひります」

稟
「わ、私は、大地様とお呼びします」

稟は、首をトントンしながらそついった。

風

「私はお兄さんでー」

大地

「わかつた。好きに呼べばいい

星

「それで、主はお一人で旅を？」

大地

「いや、あと4人仲間が……あ」

大地はバッグに入れた一刀達をすっかり忘れていたのだつた

to be continued...

第3話『大地、昇り龍に会つたの事』（後書き）

作者「といつことで、いかがだったでしょうか？」

大地「とりあえず、新しく3人仲間なつたな」

作者「あいあい、作者は凛と風が好きなので、蜀勢に入つていただきました」

大地「それでか……じゃ、他にも引き抜くのか？」

作者「それはもう、あとオリジナルの人達も出てくるよ～」

大地「それは楽しみだ」

作者「まあとりあえず、次回予告してくださいな」

大地「了解……、次回、第4話『大地、公孫贊に会つたの事』」

作者「普通の人登場です」

公孫贊「普通つて言つなつ……」

作者「お楽しみに～」

第4話『大地、公孫贊へ普通の人』に会つての事』（前書き）

大地は軍資金調達の為、大きな街に移動している途中、盗賊に襲われている村を発見し、

盗賊達を退治したが、大地の言動から勘違いした趙雲が大地を倒そうと襲いかかってくるが、

趙雲の連れの一人により、誤解は解け、三人は大地の仲間になるのだつた……

第4話『大地、公孫賛へ普通の人』に会つた事

目的の街までもう少しの茂みで、大地は腰のバッグを開いたすると、1人の青年と3人の女の子が

現れる。

星達は、田を畠のようにして驚いている。

星
「主、これは一体……」

風
「これは驚きました」

稟

「大地様は、妖術使いですか？」

大地

「これは、妖術じゃないさ。このバッグは何でも入るんだ。それこそ船とかもね……」

星

「ほほう、それは便利ですね！」

星が目をあやしく輝かせている。

一刀

「大地さん、俺達がバッグの中に入った間に何があったの？」

それとその人達は？」

大地は、一刀の質問に淡々と答える。

大地

「目的の街に行く途中に盜賊に襲われている街があつてな、盜賊退治していたら

そこの星に勘違いされくな。なんだかんだで仲間になつた」

一刀

「なんか、色々突っ込みたいけどとりあえず自己紹介かな？
俺の名前は北郷 一刀。姓が北郷で名が一刀。字はないし、真名もない」

桃香

「私の名前は劉備玄徳。真名は桃香だよ、よろしくね～」

愛紗

「私は、関羽。字は雲長。真名は愛紗だよ、よろしくたのむ」

鈴々

「鈴々は、張飛なのだ。字は翼徳。真名は鈴々なのだ！」

一通り、一刀達の自己紹介がすむと続いて星達が自己紹介する。

星

「私の名前は、趙雲。字は子龍。真名は星だよ、よろしく

風

「……ぐう」

稟

「寝ぬなつ！」

風

「……おおつ？」

風

「私の名前は、程？といいます。字は仲徳 真名は風です
よろしくですよー」

稟

「私の名前は、郭嘉。字は奉考。真名は稟と申します。皆様よろしくおねがいします」

大地

「風、名前が前に聞いたのと違つが？」

風

「元々、士官したときに改名しようと思つたのでー」

大地

「そうか、わかつた……」

一刀は、3人の名前に驚いている。

一刀

「昇り龍趙子龍に神算鬼謀の郭奉考それと奇策妙計程仲徳だつて！」

一刀の言葉に星達は、

星

「ほほう、私の名前もそこまで世に知られていろとは……」

星は笑みを浮かべ、

稟

「神算鬼謀……人知の及ばないような、すぐれた巧みな策略。いい言葉ですね」

凛の眼鏡が怪しく光る。

風

「奇策妙計ですかー。お兄さんいつまこー」といいますー」

風もうれしそうだ。

宝?

「おひおひ、兄ちゃん、風を喜ばすなんてやるじゃねーか

どう聞いても風の声の風の頭に乗つていてる彫刻がそう言つた。

それを聞いて、鈴々が風に

鈴々

「風の頭に乗つているのはなんなのだ?」

そう訊ねると

宝？

「俺の名前は宝？。まあ風のお守とおぼえておいてくれい」

風

「冗談は、その存在だけにしてほしいのですよー」

宝？

「存在自体否定かよつ！」

大地

「……とつあえず、仲良くなってくれ」

全員

「はい！（はい）」

そのあと、桃香の目標や決意を聞き、三人は、桃香に仕てくれると言ひ事になつた。

それから、大地達は街へとたどりつき、大地と愛紗それと凛がノートなどを売り、

結構な額のお金が大地達の懐へ入つた。

大地

「結構な額になつた」

稟

「はい、これなら結構な人數雇えそつです」

鈴々

「『』飯もいっぱい食べれるのだ

一刀

「でも一応、『』の偉い人に一言言つてから募集かけないか？」

愛紗

「たしかに『』主人様の言つ通りですね」

風

「……たしかに『』の太守は公孫贊ですねー」

桃香

「白蓮ちゃんなら私の友達だけど?」

それを聞いてみんな驚く。

一刀

「なら、会いに行つてみるか」

稟

「はい、桃香様の友人であるならば話が進めやすくなりますが

風

「とりあえず、公孫贊さんは、『普通』でいい人で有名ですからね

「

大地

「じゃ、このまま行つてもなんだし、俺にいい考えがある」

愛紗

「いい考えとは？」

大地

「みんな耳を貸せ……」

そういうて、全員、大地の話に耳を傾ける。すると、

大地の案はこうだ。

今現在、公孫贊は盜賊団5000人と交戦間近な状態だ。

しかし、公孫贊軍は約3000人。……いくら相手は雑魚達でもこの人数の差はとても大きい。

そこで、この戦でもっとも重要なのが、部隊を率いる隊長の質だ。

公孫贊の兵は大半、農民の次男や三男などである。兵の質は盜賊達とあまり変わらないまさに五分五分だ。となれば必然として兵を率いる物の質こそが最重要なのだ。

愛紗達に聞いたところ、まだ兵を率いた事が無いらしいが、

彼女達は後に三国でその名の知らない英傑になるのだ。

しかし、例え彼女達がそつであつても現状の兵隊がいないままでは、

公孫贊には信じてもらえない。

そこで、兵隊のフリをしてくる人達をそうだな～百人雇つて、

公孫贊の城に行くまで着いてきてもらつ。そうすれば、

門番は、俺達が兵を率いて訊ねてくれたと勘違いし、公孫贊に

その事が伝わるといった感じだ。

桃香

「えええ！――！」

風

「お兄さんも策士ですね～」

稟

「はい、それならはつたりとしていけるかもしれません」

愛紗

「しかし……」

一刀

「愛紗、仕方ないよ。俺達はまだ弱小なんだから」

愛紗

「……わかりました。釈然としませんが」

大地

一刀が大地の案に釈然としない愛紗を宥める。

「それでは、この案でいいか？ みんな

全員

「御意！」

それからすぐに募集をかけ、100人ほど人が集まつた。

集まつた人に兵隊の格好をさせ、

俺達は、公孫贊の城に向かうのだつた……

数分後、公孫贊の門前に辿り着き、

しばらく待たされたものの、下にも置かない扱いで玉座の間へと案内された。

侍女らしき女性の誘導に従つて、玉座の間へと足を踏み入れると

公孫贊

「桃香！ ひつさしふりだなー！」

一人の女性が玉座から離れ、桃香に近寄つてくる。

桃香

「白蓮ちゃん、きやー！ 久しふりだねー！」

公孫贊と桃香は、再会を喜んで抱き合つてゐる。

公孫贊

「盧植先生の私塾を卒業して以来だから、もう三年ぶりかー。元気

「ついで何よつだ」

桃香

「白蓮ちゃんじゃ、元気そうだね　それにいつのまにか太守様になつちやつて。すじいよー」

公孫贊

「いやあ、まだまだ。私はこの位置で止まつてなんかいられないからな。

通過点みたいなもんだ」

桃香

「さつすが秀才の白蓮ちゃん。面つ事がおつきになー

大地は公孫贊をじいーと見て観察する。

公孫贊……たしかにいい太守なんだろうが……特別何か持っているつて感じじゃない。

はつきりいつて『普通』って感じだな。

他のみんなもそう感じたようだ。

公孫贊

「今、誰か私の事を『普通』って言わなかつたか?」

桃香

「ん?　誰も言つてないよ?」

桃香は、不思議そうに小首を傾げる。

公孫贊

「……氣のせいか」

大地は思った。

自覚あるんだな」と。

公孫贊

「……それより桃香の方はどうしてたんだ？ 全然連絡が取れなか
つたから
心配したんだぞ？」

桃香

「んとね、あちこちで色んな人を助けてた！」

公孫贊

「ほおほお。それで？」

桃香

「今は、ご主人様達と一緒に旅してるよー」

公孫贊

「ご主人様～？」

そう言つて、こちらの方を見た。

公孫贊

「ご主人様つてどっちだ？」

一刀と大地を両方指を差す。

桃香

「両方だよ～ 二人とも凄いんだよ～。

管轄ちゃんお墨付きの天の御遣い、北郷 一刀さんには
神の代行者の室谷 大地さん」

公孫贊

「管轄？ 管轄って、あの占い師のか？」

桃香

「うん 流星と共に天の御遣い現れ、神の代行者、五台山の麓に
舞い降りるつて

占い、白蓮ちゃんは聞いたことない？」

公孫贊

「聞いた事はある。最近、この辺りではかなりの噂になっていたか
らな。

しかし眉唾ものだと思つていたけど……」

桃香

「一刀さんと大地さんは本物だよ！」

公孫贊

「ふーん。……」

そういうと、一刀と大地を公孫贊はじっくり上から下まで、
ジロジロと見つめてくる。

一刀 「な、なに……？」

一刀はたじろいでいるが大地は落着いた感じでいる。

桃香

「あー！ 白蓮ちゃん、疑つてゐるの！」

桃香は、公孫贊にブンスカ怒つてゐる。

公孫贊

「いや、疑つてる訳じやないって。桃香が今まで一度もウソついた事無いし。

桃香の言つ事は信じるよ。大地のほうはそれっぽい感じがするが、北郷だつけ？ こつちはそれっぽくないなあと思つてさ」

一刀

「まあ、普通そつ言つ反応だよね」

一刀は苦笑いしてそう答える。

桃香

「そんなことないよ。私には見えてるもん。ご主人様の背後に光り輝く後光が！」

一刀

「……ま、後光があるかないか別として、一応、桃香達と行動を共にしているんだ。

宣しく、公孫贊さん」

大地

「よろしくたのむ…… 公孫贊」

公孫贊は屈託なく爽やかな笑みを浮かべ、

公孫贊

「そうか。桃香が真名を許したのならば、一角の人物なのだろう。
……ならば私の事も白蓮ばいれんで良い。友の友なら、私にとつても友だ
からな」

俺達は思つた。

普通だけど……いい人だなあつと

公孫贊

「誰だ！『普通』って言ったのは！」

その反応に俺達は、苦笑いするしかなかつた。

それから俺達は白蓮に自己紹介すると事情を話し、白蓮の盜賊団退
治の手伝いをすることになつた。

ちなみに俺の策は白蓮にバレていた。

太守になる人だ。それくらい見抜けて当たり前か。

俺達は、盜賊団と対峙するまで、しばしの休息の時を過ごすのだつ
た……。

to
be

continued . . .

第4話『大地、公孫賛く普通の人』に会つた事（後書き）

作者「とにかく普通の人、ハム」と、白蓮でした~」

白蓮「普通って書つな~」

作者「まあまあ、話進めば君も普通じゃなくなるから」

白蓮「え……？」

作者「ちゃんと魔改造するよ~。強さとかは後お楽しみ~」

白蓮「やつと……やつと……『普通』とはおちりばか……長かった……」

作者「おお~よひじんじる、よひじんじる」

白蓮「それにしても私専用の武器つてでてくるのか~？」

作者「それならもう少ししたらアンケート取るからもつぢょい普通の剣で待つておきよ~」

白蓮「わかった。やつと私専用の武器が~」

作者「喜んでいる所悪いけど、次回予告よひじく~」

白蓮「わかった! 次回 第5話 『一刀、戦場の厳しさを知り大
地に弟子入りするの事』で

また会おう~次回も私が出るだ~~」

作者「では次回までよろしく」

第5話『一刀、戦場の厳しさを知り大地に弟子入りするの事』（前書き）

星達を新たに加え、ノートなどを売り、お金を手に入れた一行は、桃香の友達の

普通つ娘公孫贊に会いに城へそこで、公孫贊と話し真名を交換する。ちょうど、盗賊団との戦の直前だつた事もあり、大地一行は、手伝いを申し出、

白蓮（公孫贊）は快く手伝いを認めてくれたのだった……。

第5話『一刀、戦場の厳しさを知り大地に弟子入りするの事』

一刀

「うおお……こりゃ壯觀だなあ……」

侍女に呼ばれ、城門に向かつと大地達の目の前に、

武装した兵士たちが微動だにせず整列している。

その様に一刀はちょっとした感嘆が漏れる。

桃香

「すっ」「ーーーー！」の全員、白蓮ちゃんの兵隊さんなのー？

白蓮

「勿論や。……とは言つても、正規兵半分、義勇軍半分の混成部隊
だけどな」

一刀

「そんなんに義勇兵が集まつたんだ……」

星

「それだけ、今的情勢が混沌とし、皆の心に危機感が出ているとい
うことでしょう」

愛紗

「たしかに……大陸各地でやれ盗賊だの何だと匪賊が跋扈して
いるからな」

鈴々

「いつたいこの国はどうなつていいくのだー」

星

「民の為、庶民の為……間違つた方向には行かせやしないこと。……
この私がな」

そう眩いた星の瞳に宿る真剣な光。

その光には、単に自身といつ言葉以上の覚悟を秘めた強い煌めきがある。

桃香

「簡単には平和な世界を作れないけど、どんなに困難があろうとも
私たちは立ち止まつちゃいけない！ 立ち止まれば多くの人達が
悲しい思いをする。だからみんな頑張りう、力を合わせて…」

真剣な表情で桃香はみんなに語つと

一刀

「ああ！」

愛紗

「私は桃香様に着いていきます」

鈴々

「鈴々もお姉ちゃんに着いていくのだ」

星

「…………そうですな。がんばりましょー」

風

「くふふ、じゃ、私も頑張りますかねー」

稟

「及ばずながら私も手伝わせて下れー。」

大地

「（うむ、やつと『王』の感じが出てきたな、人々にやせじい『仁』^{じん}王』の……」

大地は、桃香の成長を嬉しく思い、

大地

「ああ……俺も協力する」

そう言って、桃香の頭を撫でる

桃香

「ふにゅあ~」

すると心地よさそうに田を細め、猫みたいになつていてくる。

それを見ていた白蓮は、羨ましそうな顔をして大地達の方へ近づいてくる。

桃香

「あ、白蓮ちゃんも一緒に頑張ろー。」

白蓮

「なんか、後付けのような気がするが……まあ、良いんだけビ。…
…私だって、救国の志はあるから。
忘れないでくれよな……」

そういつて、少しイジケテしまった白蓮なのであった。

会話を楽しんでいる内に陣形が決まる。

大地達は、左翼全部隊を任せられた。

ビリやら大地達に期待しているらしい。

そういひじてこむひひて白蓮の演説が始める。

白蓮

「諸君！　いよいよ出陣の時が来た！
今まで幾度となく退治しながらもいつも逃げ散っていた盜賊共を
今日一決せしめ殲滅してくれよう！」

白蓮の演説はまだ続き、

白蓮

「公孫の勇者たちよ！　今こそ好機ぞ！　各自存分に手柄をたてい
！」

白蓮の鼓舞に

公孫軍兵士

「つおおお

「！」

大地を揺るがすよつた闘の声で応える。

それを満足げに聞いていた白蓮が、表情を引き締め、

白蓮

「出陣だ！」

天に高々と剣を掲げ、出陣の号令を出した。

意氣揚々と縄文から出発する兵士たちと共に、大地達も一隊を率いて移動を開始した。

一刀がふと呟く。

一刀

「盗賊相手に初陣かあ。……」

一刀のつぶやきに愛紗が反応する。

愛紗

「どうかされましたか？」

一刀

「いや……」しきりの、初めてだからさ

一刀は自分の手の震えを見せながら、不安な心情を正直に吐露した。

一刀

「俺の住んでいた場所は平和でね、戦とかなかつたんだ。

だから他人事に思つてたんだ、いざ自分が戦いに身を投じよう

しているのが

……ちょっと怖くてね」

一刀を見ていればわかる。強がっているが本心は物凄く怖いのだろう。

だからこそ、言わなければならなかつた。

大地

「戦いは誰でも怖い。しかし、怖がつて何もできないじゃ、

一刀、お前　死ぬぞ」

一刀は衝撃を受けた表情になる。

当たり前だ、これは戦だ。戦争なのだ。相手との命のやり取りなのだ。

だから、必ず助かるなんてありえない。

愛紗

「ご主人様！」

大地

「事実だ。一刀……お前はどうしたいだ？」

一刀

「俺は、まだ全ての覚悟もない。……だけど桃香達と約束したんだ。協力するつて……だから俺は必ずその約束を果たす。

その為には、俺は必ずこの戦から生きて帰る！」

大地

「フ……、わかつた。ならばこの戦のあと、再度お前に問おう

そう言つて、大地は、馬を駆り先に進んで行つた。

一刀 side

大地から言われた事……

俺は本当なら最初に桃香達と会つた時に覚悟を決めないと云ひなかつたんだ。

みんなは自分の命を、信念を賭けて戦つているのに、

俺は、まだそれができてなかつた。

現実をただ見てなかつただけなんだ。

俺は……どうしたい？

そんな事はすでに決まつてゐる。

桃香達をみんなを多くの人達を助けたい。

なら、俺も現実を見つめ、命と信念をかけて前に進んで行こう。

都合の良い言いわけに心を任せていっては、何かを為すなんてできないのだから……

パシッと一度、頬を叩き、弱気な自分自身に喝を入れる。

そこには、普通の高校生の青年ではなく、覚悟を決めた一人の“漢”おんがいた。

そして俺は、それともう一つある決心をした。

一刀 side out

そして、盗賊団達との戦が開始した。

兵士A

「全軍停止！ これより我が軍は鶴翼の陣を敷く！
各院肅々と移動せよ！」

本陣からの伝令が、命令を伝えながら前線に向かって駆け去つて行つた。

愛紗

「いよいよですね」

一刀

「ああ。兵隊さん達の指揮は、愛紗と鈴々、補佐に風と凜。よろしく頼むな」

風

「ふふふ、御任せなのですよー」

稟

「御意」

鈴々

「合点なのだ！」

愛紗

「桃香様は一刀様と共に」

桃香

「うん。一人も気をつけてね」

愛紗

「御意。では！」

愛紗は一刀と桃香にお辞儀をして、

愛紗

「聞けい！ 劉備隊の兵どもよー。敵は組織化もされてない雑兵どもだ。氣負つな！」

さりとて慢心するな！ 公孫贊殿の下、共に戦い、勝利を勝ち取ろうではないか！」

公孫軍兵士

「応つ！」

愛紗

「今より、戦訓を授ける！ 心して聞けい！」

公孫軍兵士

「応つ！」

稟

「兵隊の方々は三人一組で行動を！　一人の敵に三人で当たれば必勝です！」

風

「一人は敵と対峙して防御。　一人は防御している横から攻撃。最後の一人は周囲を警戒してくださいねー」

愛紗

「敵は食えた獣と思え、情をかけるな！　情を掛ければ、いつしかそれは仇となつて跳ね返つてくることを知れ！」

鈴々

「みんなで一生懸命戦つて！　勝つて！　平和な暮らしを取り戻すのだー！」

公孫軍兵士

「おお　　っ！」

愛紗

「全軍、戦闘態勢を取れ！」

愛紗の号令と共に兵士たちが抜刀する。

それと同時に、盗賊達が突出してきた。

緊迫した面持ちの伝令が、本陣に向かつて疾走していく。

鈴々が叫ぶ！

鈴々

「いよいよ戦い開始なのだ！ みんな鈴々に続け

つ！」

愛紗も叫ぶ！

愛紗

「関羽隊、我らも行くぞ！」

公孫軍兵士

「応つー！」

愛紗から突撃の合図が出る。

愛紗

「全軍、突撃いい

つ！」

その合図で指揮している兵隊全員、盗賊達に突撃していく！

10分後、盗賊達の数も減つていき、総崩れになつた。

愛紗

「よし、今こそ割れたの力をを見せつけるときー！」

大地

「全員、敵から離れるー！」

愛紗

「大地様、一体何をー！」

大地は、味方が全軍、敵からかなりの距離離れたのを見て、

空間から5つの鎌を持つ投擲槍を取りだす。

愛紗

「それは？」

大地

「宝具『ブリューナク』」

そう言つと槍を斜めに構え、

大地

「真名解放『光神の輝き轟きし五星...』！」

と叫び敵の真上に投げる。すると5つの鎌は5つの光と化し、盗賊達がいた場所を

ドゴオオオオオオン！－！

凄まじい音を立てて周囲を吹き飛ばす。

愛紗達は、その光景に

愛紗

「なつ……」

風

「おおー、これはすごいー」

鈴々

「にやにや、一体何なのだ！？」

稟は、かけている眼鏡がズレ呆然となつてゐる。

仲間の兵たちも口を大きく開き、その場から動けない。

砂煙が消え、盗賊がいた場所にはかなり大きなクレーターができる
おり、

残りの盗賊達は、全滅していた。

こゝして、盗賊団は壊滅したのだつた。

戦が終わり、城に帰還すると一刀が大地に駆け寄る。

一刀

「大地さん！ 僕、覚悟を決めた！」

大地

「そうか……」

一刀

「そこでお願いがある。僕を鍛えてください！」

そついつて、土下座をする。

大地

「なぜだ？」

一刀

「自分の身は自分で守らないといけないのは当然だけど、一番の理由は大切な人を守る時に力がなければ守れないから……だからお願ひします！」

その一生懸命な願いに大地は、

大地

「……そのかわり、俺は手加減はしないぞ。それでもいいなら一刀を鍛えよう……」

その言葉を聞き、一刀は満面の笑みを浮かべ、

一刀

「よろしくお願ひします、師匠！」

こうして、大地に弟子が出来た。名を北郷 一刀。

これから一刀は死んだ方がましと思つような修業を送ることになるのだが、

それはまた別のお話……

to be continued.....

第5話『一刀、戦場の厳しさを知り大地に弟子入りするの事』（後書き）

作者「といふことで、大地、宝具使っちゃいましたが、どうでしたでしょうか？」

大地「最初はゲイボルクにするんじゃなかつたつけ？」

作者「そななんだけど、色々調べてたら、ブリューナクのほうがいよいよ氣がしたのでね」

大地「ほむほむ、あの真名解放は？」

作者「それっぽい事書いて適当に作りました（――・）」

大地「まあ、それはいいとして、これからも宝具出すのか？」

作者「必要に応じて……」

大地「はあ～、とりあえず、次回予告だ。

次回、第6話『大地、臥龍・鳳離に出会いの事』でまた会おう

アンケートと「いか募集

「」でアンケートと「いか募集です。

公孫贊及び今後出てくる水鏡先生のオリジナル武器名を募集します。

とこつても賞品はありませんが（――・）

それでもいいとこつ方は、感想のところにオリジナル武器名とどんな装備効果があるかを書いて

以下のよつな書き方で送ってくださいな。

例：普通の剣EX 装備効果：なんでも普通にこなせる。

送られてきた物は全て田を通し、いいものは今後出てくるオリキャラの装備になるかもしれませんので

お楽しみに～

一応、〆切は、12月18日の0時まで。

数多くの応募お待ちしております（――）

第6話『大地、臥龍・鳳雛に出会いの事』（前書き）

前回までのあらすじ

大地達一行は、盜賊団討伐に参加し、見事盜賊団を撃破した。その討伐のさなか、一刀は自分の非力を嘆き、ここで生きていこうという覚悟を決め、

大地に弟子入りを志願する。大地は、一刀の目に決意がある事を感じ、

一刀を弟子にするのであった……

第6話『大地、臥龍・鳳雛に出会つた事』

一刀 side

盗賊団との戦で大勝利を飾った俺達は、まだ公孫贊の下に留まつていた。

その間も盗賊討伐の日々続き、劉備軍の將軍、特に愛紗・星・鈴々達の武名を

知らぬ者はほとんどいなくなつた。

そして、当然大地も討伐時の活躍により、知らぬものがいないほど有名になつた。

大地は人々から尊敬と畏怖の念を込めて、『盗賊狩り』や『戦場の破壊者』など

多くの一つ名がつけられた。それをつけられた本人は、

大地

「なんだ、その厨一臭い呼び名は……」

と呆れて文句を言つていた。

それは置いとくとして、最近の大陸の様子がおかしい。

匪賊の横行。大飢饉。

そして極めつけは疫病の猛威。

人々は暴力に晒され、慎ましく生きよつとしても、その日食べる物に苦労し、

あげくに病で倒れてしまつ……となれば、人々の心が安定するはずもなく、

暴乱は暴乱を呼び、暴力は暴力を招いた空氣に 大陸全土を混沌とした空氣に

満たされている。そんな空気が日々、重く重く圧縮され、人々の心に沈澱していく

となれば、そりやピリピリした雰囲気になるさ。

そのピリピリが村を覆い、街を覆い、城を覆い尽くし……最後に大陸中へと

広がつていいくのは時間の問題だと思われたある日、事件は起つた。

地方太守の某性に耐えかねた民が、民間宗教の指導者に率いられて武装蜂起し、

官庁を襲う事件が起きた。

それが後に『黄巾の乱』と呼ばれる戦いの序章だったのだ。

鎮圧に向かつた漢軍が反撃を受けて全滅。

それをきっかけに、暴徒たちは周辺の街へと侵攻を開始した。

それはまるで蝗のよくな勢いで、あつという間に大陸の三分の一が暴徒達に乗っ取られ、

世は動乱の時代を迎える。

漢王朝も早期に解決できると多喜を括つてはいたが、討伐隊全滅の報に狼狽し、驚愕し……

最後に恐慌に陥つた。その為、官軍は頼みにならずと判断し、地方軍閥に討伐を命じたのは、

つい昨日の話だ。

大地と俺は、この命令を聞いた時、俺達の戦いがはじまる事を悟つたのだった……

一刀 side out

大地・一刀

「ごめん（すまん）、遅くなつた」

二人で修業をしていた所を白蓮の侍女が呼びにきて、俺達は玉座の間に連れられてやつてくると

白蓮の他に星・愛紗、桃香に鈴々、稟・風と、仲間たちが一堂に揃つていた。

「修業中すまんな。呼び出してしまって」

大地

「別に構わない……。それより皆揃つて何かあつたのか？」

白蓮は、真剣な顔になり、

白蓮

「……大地も、この城に朝廷よりの使者が来たのは知つてるよな？」

大地

「ああ。黄巾党を討伐せよつて命令だつたか？」

白蓮

「そうだ、私は既に参戦する事を決めているのだが……」

白蓮がそこまで言つと桃香が、

桃香

「白蓮ちゃんがね、これは私たちにとって好機なんじやないかって」

大地

「独立する為の好機といつ事か」

愛紗

「さすが、大地様、良くおわかりで」

大地

「そりや黄巾党で手柄立てれば、知名度が上がるからな。
それに朝廷からの恩賞とかもあるだろうし」

白蓮

「よくわかつてゐるぢやないか。それに桃香達がその氣なれば、きっとそれなりの地位になれるはずだ。そうすれば、もつともつと多くの人達を守る事が出来るだらう?」

白蓮

「それに残念ながら、私の力はそれほど強くない。……そりやこの動乱を収めたいと思つてゐるけど今はまだ力不足だ」

大地

「なるほど……わかつた。」
「」
俺達は俺達の道を進んで行こう

大地がそつと鈴々が不安そつに

鈴々

「でも、鈴々達だけで大丈夫かなあ?」

一刀

「それは分からぬけれど。でもいつまでも白蓮の世話になる訳にはいかないんだから」

愛紗

「そうですね。……しかし、我らには手勢といつものが無い。それが問題ですが……」

愛紗のその一言に星が口を開いた。

星

「手勢ならば街で集めさせてもらえば良い。な、白蓮殿」

星の言葉に白蓮が驚いた表情で

白蓮

「お、おいおい！ 私だって討伐軍を編成する為に兵を集めなくちゃいけないんだから、

そんなの許せるわけないだろ！」

だが、星はそれに動じず、白蓮を口先三寸で丸めこむ。

星

「白蓮殿。今こそ器量の見せ所ですぞ？ それに白蓮殿の兵達は皆勇猛ではありますか。

そんなケチくさい事言わないで器の大きい所を私たちに見せてくだされ」

白蓮

「うつ…… はあ～～、わかった。でも、あまり多く集めないでくれよ～」

白蓮はため息をつき、大地達が義勇兵を募る事を認めてくれた。

それから大地達は、愛紗と稟が、義勇軍を募り、六千人の人達が集まつた。

白蓮の顔は、かなり引きつってたが、兵糧と食糧も用意してくれた

本当にいいやつだ。

ということで、全ての準備を整え大地達は、集まつた義勇兵を率いて出陣の時を迎えていた。

桃香

「たくさん集まつてくれたからなんとか戦えそうだね、『主人様達』

一刀

「ああ、白蓮にはいつか恩を返そう」

大地

「そうだな、それとこれから仕事を決めないとな

鈴々

「ひつきとーを探し出して、片つ端からやつづけるのだー」

稟

「でも、そんな乱暴なやり方だと、すぐに兵糧が無くなりますよ?」

鈴々

「むう……ならどうすりや良いのだー? 風は何か考えあるのかー?

?」

風

「……ぐう

稟

「ひ、風、寝るなつー。」

風

「……おおひ？」

風

「んー、そうですね

」

風が考へていて、

？？？

「しゅ、しゅみましえん！ あう歯んじやつた」

ど「からともなく声が聞こえてきた。

一刀

「…………？」

大地

「？」

キヨロキヨロと周囲を見回してみると、声を上げたであらわ人物の姿が見えない。

？？？

「はわわ、じうぢです。じうぢすよお～！」

桃香

「え つと……瓶は聞こえど姿が見えず……」

愛紗

「ふむ？ 一体誰が？」

風

「みなさん、『下』見てるんですかー 下ですよ、下」

風の言葉により大地が下を向いた先に

可愛らしい帽子と……歯でも生えていたつた帽子を被つた一人の少女が、

緊張した面持ちで立ち尽くしていた。

大地

「皆、下を向いてみろ」

全員の視線が、下に向いた瞬間暁と風を除いた全員驚いた。

???

「！」、「ここにわしゃー！」

???

「ち、ちは、ですぅ……」

一刀

「ここにわしゃ。えーっと……わしゃれど？」

???

「わ、私はしょ、諸葛孔明れしゅー！」

???

「私はあの、その、えと、んと、ほ、ほと、ほーとつでしゅー！」

二人は物凄くカミカミな感じでそう言った。

桃香

「んーと……諸葛孔明ちゃんに、ほ、ほ……」

鳳統

「鳳統でしゅ！ あう……」

愛紗

「諸葛亮に鳳統、か。……あなた達のような少女がどうしてこんな
ところに？」

諸葛亮

「あ、あのですね、私たち荊州の水鏡塾っていう私塾で学んでいた
んですけど、
でも今この大陸を包み込んでいる危機的な状況を見るに見かねて、
それでは、えと……」

鳳統

「力の無い人達が悲しむのが許せなくて、その人達を守る為に私た
ちが学んだ事を
活かすべきだって考えて、でも自分たちだけの力じゃ 何も出来な
いから、
誰かに協力してもらわなくちゃいけなくて」

諸葛亮

「それでそれで、誰に協力してもらえば良いんだろうとを考えた時に、
天の御遣いと

神の代行者が義勇兵を募集してるって噂を聞いたんです！」

鳳統

「それで色々話を聞くうちに、皆さんのが私たちの考えと同じ
だつて分かつて、
協力してもらつならこの人だつて思つて」

諸葛亮

「だからあの……わ、私たちを戦列の端にお加えください……」

鳳統

「お願いします！」

真剣な眼差しで大地達を見つめ、必死に懇願する一人の少女。

桃香

「んー。『主人様達、どうしようか？』

大地

「二人を戦列に加える。この二人なら、必ず助けになるはずだ」

一刀

「俺も賛成だ。俺もこの子たちが俺達を助けてくれるとそう信じて
る」

桃香

「じゃ、決まりだね！」

愛紗

「しかし……年端もいかぬ少女を戦列に加えるのは……」

大地

「なに。将は何も剣を持つて戦うことだけじゃないだろ?」

愛紗

「そこまでおっしゃるのなら私は、主人様達の判断に従います」

一刀

「そういうことで……二人とも、俺たちに協力してくれるかな?」

諸葛亮

「はひつ!」

鳳統

「がんばりましゅ!」

一刀

「ありがとう。……俺の名前は北郷 一刀。一応、天の御遣いって身分らしい」

大地

「俺は、室谷 大地。神の代行者だ。よろしくな……」

諸葛亮

「わ、私はえと、姓は諸葛! 名は亮! 字は孔明で真名は朱里です! 朱里って呼んでください!」

鳳統

「んと、姓は鳳で名は統で字は士元で真名は雛里って言います! あの、よろしくお願ひします!」

一刀

「朱里ちゃんと雛里ちゃん、か。……」(さくら)そ宜しくなー。」

こうして、新たな仲間2人が加わった。

その様子を水晶球で見ている人物が三人。

？？

「おのれ、北郷め！」

一刀を歳が変わらない白い道服を着た青年がそう憎しみを込めて呴いた……

to
be

continued...

第6話『大地、臥龍・鳳雛に出会いの事』（後書き）

作者「はい、今日は、はわわ軍師とあわわ軍師の2人が仲間になりました」

大地「それはいいが、最後のやつは？」

作者「それは次回わかります。例のあの人達です」

大地「ん？　あいつらなら一人じゃ？」

作者「もう一人は君の【お密さん】だよ」

大地「！……なるほど」

作者「とにかく」と、次回予告より

？？「次回、第7話『暗躍する闇、動き出す使徒の事』でまた会おう」

今度こそ、殺してやるぞ！　北郷！」

作者「殺氣出しまくりだな、こいつ（――・）」

？？「それがいいんですよ」

作者「お前もかよ、もう一人は？」

？？「それがやることがあるそつで」

作者「ふ～ん、ではまた次回お会いしましょ。さよなら。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2406z/>

A.O.G -Agent Of God- ~代行者《エージェント》と三国の恋姫たち~
2011年12月15日23時47分発行